

### 常省祭のついで

四十一歳で亡くなった藤樹先生には、長男虎之助七歳、次男鍋之助三歳、三男彌三郎(常省) 生後五十日の三人の遺児がありました。(中略)

藤樹の門人で岡山藩主池田光政に仕えていた熊沢蕃山は、光政に遺児たちの召し出しを願い出て、其れが認められ遺児は順に岡山に行き、禽獣として仕えました。しかし、二人の兄たちが二十歳を過ぎると相次いで死去したため、彌三郎が中江家の家督を継ぐことになりました。やがて彌三郎は岡山藩校の副学校奉行である学校監になりましたが、幕府の心学忌避(林羅山を中心とした朱子学が国学となり、藤樹の考え方はそれに沿わなかった)により蕃山と光政との間がうまくいかなかったこともあり、小川村に帰りました。三十一歳の時でした。(中略)京都への移住、対馬藩の客分等を経て、小川村に帰って一か月後、六十二歳で死去)

常省祭は藤樹書院の年中行事として七月二十三日に儒式で執り行われ、幕府の心学忌避の中で父、藤樹先生の学問を受け継いだ常省の生涯を偲ぶとともに、孝経拝誦、藤樹先生の遺品、書籍等の文化財展示説明などを行っています。

(右は、令和元年度常省祭の要項から抜粋させて頂いたものです。)

### 「よえもんさん通り」 「藤樹先生のことば」

JR安曇川駅から道の駅「藤樹の里安曇川」へ向かう「よえもんさん通り」に、扇型の銘板「藤樹先生のことば」が八枚並べられていることをご存じでしょうか。

これらは、旧安曇川町時代(二〇数年前)に、「よえもんさん通り」が整備されたことに合わせて、設置されたものです。扇型の銘板に刻まれた「藤樹先生のことば」の選定・解説は、当時の安曇川町教育委員会におられた中江彰氏が、ご自身の編著『中江藤樹のことば』等をもとになされました。



「よえもんさん通り」

皆様も是非一度、「よえもんさん通り」で「藤樹先生のことば」をご覧になってください。下の写真は、そのうちの四枚の銘板です。残りの四枚は現地でご確認ください。

#### 「五事を正す」

近江聖人  
中江藤樹先生の教え

貌(顔かたち) 和やかな顔つきをし  
言(言葉づかい) 思いやりのある言葉で話しかけ  
視(まなざし) 澄んだ目で物事を見つめ  
聴(よく聞く) 耳を傾けて人の話を聴き  
思(おもいやり) 真心こめて相手のことを思う



#### 藤樹先生のことば(1)

父母の恩徳は天よりも  
たかく、海よりもふかし。  
父母からうけた過去の恵みは、あまりにも大きく、とてもそれを推し量ることはできません。いずれの父母も、わが子をりっぱに育てるために、あらゆる苦勞を惜しまないものです。ただ、そのような苦勞を、あえてわが子に向かって語ろうとはしませんが、その恵みがわからないのです。藤樹先生はそのような父母のなしてきたあらゆる苦勞を、「千辛万苦」という言葉でいあらわしています。



#### 藤樹先生のことば(2)

それ学問は心のけがれを清め、身のおこないをよくする本実とす。  
そもそも学問の目的は、私たちの心のなかにある汚れを取りのぞくことと、日々の生活のおこないを正しくすることにあるのです。高度な知識を手に入れることが学問だと信じている人たちがすれば、まことに奇異に思うかも知れません。だが、そのような知識のつめ込みのために、かえって他人をあなどったり、見くだししてしまう心の、ふかく染まっている人が多くと藤樹先生は説いています。



#### 藤樹先生のことば(3)

人間はみな善ばかりにして、  
悪なき本来の面目をよく観念すべし。  
私たちは、姿やかたち、社会的地位さらには財産のあるなしから、その人を決めつけてしまつわるいクセがあります。だが、すべての人間は、金銀やダイヤモンドよりも、なおすくれた宝を身につけて、この世に生まれできたのです。その最高の宝を、むかしから「明德」とよんでいました。藤樹先生が、すべての人間は善人ばかりで、悪人はいないと説かれたその根拠は、じつにここにあるのです。

